
妖の世界

霜月サヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖の世界

【Nコード】

N3123BA

【作者名】

霜月サヤ

【あらすじ】

忘れてはいけない前世の記憶…そして現在……

この作品はサイトに掲載されているものです。
感想ありましたら、よろしくお願いします。

はじめに(前書き)

まずは読んでください

はじめに

『妖の世界』では、

女主人公をメインとする女主人公側と

男主人公をメインとする男主人公側に

分かれていきます。

また、この作品は名前変換機能を利用できる場所にて、作者が書いているものと同じです。

ベースは『ぬらりひよんの孫』ですが、他作品が交わります（主に、魔法系）。

女主人公側では、リクオとの恋愛要素が入ることがあります。

ので、そういったのが苦手という人は読まない方がいいです。

男主人公側では、女主人公側とは違い、恋愛要素的なものが入りません。

また、シリアス的なものが女主人公側より多くなっておりしますので、注意してください。

設定（前書き）

オリジナルキャラの設定

設定

女主人公

名前：櫻井 有紀

通称：ユキ

年齢：12歳（中学1年生）

誕生日：12月02日

髪色：黒

目の色：黒

一人称：私

口調：乱暴な言葉遣いはしない。だけど、怒ると変わる。
服装：学校や外に出かける以外は、普段着物。

呼び方

・光輝 お兄様、コウ兄様

・両親 お父様、お母様

・リクオ 小学時代は奴良君、リクオ君

・ゆら 花開院さん

男主人公

名前：櫻井 光輝

通称：コウ

年齢：15歳（高校1年生）

誕生日：10月02日

髪色：銀

目の色：銀

一人称：俺

口調：時と場所を考えて、変えて話す。

服装：普段は着流し。羽織の色は、象徴の水色にしている。

備考：櫻井家の現当主であるが、学校にはアルバイトと偽って、学校側に話している。

呼び方

・有紀 ユキ

・両親 父上、母上

・リクオ リクオ

・ゆら 陰陽師、陰陽少女

その他

・父親

銀の髪で銀の目。まだまだ若く見られる。櫻井家の前当主。

・母親

黒髪黒目。外見と実年齢が釣り合わないじゃないかってくらいの美人。

・祖父

すでに他界している。

櫻井家の中では、異例の長寿だった人物らしい。また、過去にも詳しくかった。

・シロ

光輝の使い生物。

どんな生物なのかは、依然謎で、喋ったり飛ぶことができる。

・クロ

有紀の使い生物。

シロと同じだが、体の色がちょっと濃い。

・彼女

櫻井家当主の部下。

得意分野が情報収集のため、主な仕事は情報収集の活動である。
名前は、愛梨^{あじな}峻。

イラストページ(前書き)

イラスト集的なもの

イラストページ

『妖の世界』に関するイラストたちです。

本編には支障がないイラストを描きますが、一応気を付けてくださ
い。

イラストらは、作者である霜月サヤが描いたものです。

そのことを頭に入れて、見るようお願いします。

このページに関しては、イラストが増えるたびに更新していき
ます。

下からになります（項目ごと、下に行くほど新しい）

1・櫻井光輝

> i 3 3 8 6 1 3 | 4 5 7 2 <

2・櫻井有紀

閲覧、ありがとうございました

第零章（前書き）

小学校時代です

第零章

忘れてはならない

我が一族の血がどんなのかを

忘れるな

第零章

「光輝様、有紀様！お時間ですよ」

朝はいつも騒がしい。

お手伝いさんが言っている“お時間”は、朝食、学校のこと。

「ふあああ、眠い……」

だけど、これがいつもの日常。

私は眠気を噛み殺しながら、部屋の外に出る。

「「おはようございます、有紀様」

「うん、おはよう」

「おはよう、ユキ」

「あ、コウにいさま〜！」

私のおにいさまがやって来た。

「挨拶は？」

「あ…おはようございます、おはようございます」

「よし、行くか」

「…」

「おはようございます、父、母」

「おはようございます、おとうさま、おかあさま」

「あ、おはよう」

「おはよう、ひ、ひ、キ」

「朝食でございます」

お手伝いさんの声で、私たちの朝食が始まる。

「「いただきます」

気持ちがいくらい、綺麗に八モった。

朝食が食べ終わり、学校に行く。

「それでは、行ってきます」

「行ってきます！」

それが、いつもの日常である。

第一章（前書き）

原作1話分な為、めっちゃ長いです

第一章

ああ、はじめまして

でも、貴方は覚えていないのね

でもね　いつか、きっと

第一章

「おにいさま、今日は遅いのですか？」

「ん？…いや、今日は遅くない。一緒に帰れるよ」

「やった〜！」

私は大きく喜ぶ。

しばらくし、バスはやって来た。

「おはよう、カナちゃん、奴良君」

次に止まったバス停から入ってきた二人に挨拶をする。

「おはよう、ユキちゃん」

「おはよう」

二人はコウにいさまには挨拶をしない。というよりも、おにいさまが既に、持参している本を読んでいるため、挨拶ができないって言った方が正しいかも知れないが。

「わー、すっごい大きな家」

「奴良君ち？うっそー」

前方の席に座っている子達が、奴良君の家を見て言っている。

「（確か、奴良君の家は、妖怪一家でもあるんだよね）」

一度、櫻井家の一族として訪れた記憶がある。

それにしても、おにいさまは相変わらず次期当主として、移動中でも勉強しております。

「こうして、子を喰うおそろしい“妖怪”は、陰陽の美剣士によって退治され、それが鎮社ちんしゃされたのが今の璞神社めいけんといわれています！以上、私たちの班は郷土の伝説をまとめました」

パチパチ

みんなが關心している中、一人だけ、ポカーンとしている人がいる。

それが、奴良君こと、奴良リクオ。

「こっわー。妖怪伝説だつて」

「このあたりに昔出たんだと」

「いやー」

「先生ー、今のは何点の出来ですか？」

みんながワイワイとしている中、清継が先生に聞いた。

「満点よ」

「さっすが、清継くん！」

「えっ」

そんな中、一人納得していない人がいた。

「ちょ…ちょっと待って！！今の話、おかしくない？」

そう、奴良リクオであった。

「妖怪って、いい奴らだよ！」

シーン、とする。

「（あーあ、これはちょっとヤバいかも…）」

そして有紀が思っている通りになる。

「え」

「な…何？」

「そりゃ…たしかにドジばかりだけど…。青田坊は力持ちだし、雪女の料理は冷めてるけどうまいんだ」

リクオが一生懸命、弁解をする。

「え…何言っているの、この子…」

「こいつ、さっきから変なんだよ……」

当然、戸惑いだすみんな。しまいには、

「おめー何だよ！！清継くんの作った自由研究にケチつけよーって
のか！！」

「え！？」

それに対するリクオは

「ホントだつて！！ボクのおじーちゃんはあ！妖怪の総大将なんだ
から！！」

「リクオ君？」

「ホー！じゃあ君のおじいちゃんは“ぬらりひょん”じゃあないの

かい？」

清継が言う。

「！？そー！よく知っているね！？有名なの？」

リクオが清継を指して聞く。

「おバカ：“ぬらりひょん”ってのはなあ〜

人の家上がりこんで、勝手にメシを食ったり、わざと人の嫌がることをやって困らせたりする、すっごい『小悪党』な妖怪だろっが！何を英雄ヒーローみたいに言ってるの？」

「えー、そんな奴いやだよー」

「キモーイ」

そのことを聞いたみんなは、そんなことを言う。

「（まあ確かに、“現在”いまはそんな感じのをやっているらしいけど）

」

有紀は、櫻井家代々から残されている書物に書かれていることと、
現在いまを比べてみる。

「ハハ…でもみんな安心して！

妖怪なんてのは、昔の人が作った創作だから！

この現代に出るわけないしね！」

「そっかー。さすが清継くん！」

「实际いたら怖いしね！」

「ねー」

「ちよっ…ちよっと待って！！

でも…でも…ボクんちに」

「しっつこいわね 奴良！！アンタ、マジキモいんだけど」

「ガキくさいんだよ！！

清継くんのどーよこの大人な会話！！」

「妖怪とか……いるわけないじゃん!？」

それらの言葉には、私自身、黙ってはいられなかった。

「ホントにそうかな？」

「え、何!？」

「いるとか、いないとか、そんなこと、人それぞれじゃないの!？
それなのに、人それぞれの考え方を否定できるほど、あなたたちは
偉い人間なわけ!？」

語尾はキレ気味になった。

「ユキちゃん……」

少し、ガアアンとしていたリクオの顔に元気が戻っていた。それでも、シヨックは抜けていなかった。

「……先生」

「は、はい」

「私、気分悪いので、保健室に行きます」

「わ、わかったわ」

そのまま有紀は、教室を出た。

保健室に行けば、丁度誰もいなかった。

「（おにいさま…コウにいさま…）」

胸元にあるペンダントを握って、兄に話しかける。

『（）どうした、ユキ？（）』

何度か話しかければ、兄の返答があった。

「（自由研究の授業で、ちょっと気分が悪くなることがあったので、本日は保健室にあります）」

『（そうか…わかった。放課後、迎えに行くよ）』

「（ありがとうございます、おにさま）」

会話が終わると同時に、保健室の先生が入ってきた。

「あら、櫻井さん。どうしたの？」

「ちょっと、気分が悪くなってしまったんです」

「そう。ゆっくり休んでね」

「はい、先生」

放課後になるまで私は、保健室で休んだ。

放課後

「ユキ、迎えに来たよ」

「あ、おにいさま！」

「全く…、訳を聞くからな」

困ったように言う兄。

「はい…」

もちろん、私の返答はYESだけである。

「……なるほどな」

保健室に行くことになった経緯をコウにいさまに話すと、おにいさまは納得したように頷いた。

「……タイミングが悪すぎる……」

おにいさまが呟いた、その言葉の意味をその時はわからなかった。

「「ただいま」

「お帰りなさいませ、光輝様、有紀様」

「父上は、いつものところにいるだろ？」

「はい」

「じゃあ、ユキ」

「なんですか？」

「俺は、父上のところに行くから」

「わかりました」

今、私は縁側に座っている。

確か今日、おとうさまとコウにいさまは、奴良組のところに行くらしい。なんでも、総会のためらしいけど。

おにいさまも行くのは、次期当主として慣れさせるためだと思うけど。

「ユキ」

「あ、おかあさま」

「今日は、二人とも遅いから、アナタは寝なさい」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ、ユキ」

そのまま私は、自分の部屋へ戻った。

布団の中に入っても、すぐに寝れるわけでもなく……。
なんとか寝ようと努力をしながら、眠りについた。

今日もおにいさまと一緒にいる。それは、とても珍しい。だから、
思わず聞いてしまった。

「おにいさま、今日も一緒に帰るのですか？」

「ああ、というより、今日は気になることが起こりそうなんだ」

おにいさまが気になることとはなんだろうか……？

「あ、アレは……」

私が指したのは、リクオとカナの姿だった。

カナは、バスへ向かっていった。

「奴良君！」

メソメソしている奴良君をちょっと、驚かせたかった。

「うわぁっ」

奴良君は驚き声を上げた。

「さすがに後ろから声をかければ、誰だって驚くだろ、ユキ」

「エへへ…。」

奴良君は、バス乗らないの？」

「乗らないよ」

乗らないと、意地を張るリクオ。

「お前、昨日のこと、まだ引きずっているのか？」

おにいさまが言っている昨日は、私が知っている昨日の出来事ではないことは確かだろう。

「……」

「まあいい。昨日、俺が言ったこと忘れるなよ」

「おにいさまが何を言ったのか、ご存知ではありませんが、無理しないで下さいね」

「じゃあな」

「では」

そのまま私たちは、バスへ向かったのだった。

後ろの席に座っているカナとその隣の子が話をしていた。

「ね……ね……奴良君じゃないけど……あの伝説って……続いているらしいよ」
「」

「え……何が……」

「だから…妖怪ー？
何人も子供が神隠しにあってんだって！
ちようど…このあたりで…」

「や、やめてよ〜」

その会話を聞いていた私は、そつと兄を見る。

兄の表情は、一段と険しくなっていた。どうやら兄には、この仕業
が誰かがわかつているらしい。

「おい！！君たち！！待ちたまえ！！
妖怪など実際にはいない！！ボクが研究で…」

「！！すぐに、背を下げるッ！！」

おにいさまが声を張り上げた。その後、小さな声で、衝撃が来る、
と言った。

「キヤアアア…」

コウにいさまが声を張り上げた後すぐに、バスに衝撃が走った。

「…………ユキ…………ユキ、大丈夫か？」

「う…………お、にいさま…？」

目を開ければ、心配しているおにいさまの顔が見れた。

「腕…、出して」

「腕？」

「血、出ている。治すから」

「おにいさまがやらなくても、私自身が…」

「お前だと、敵にバレる。お前はまだ、血の力加減が不安定だ。だから、俺がやってやる」

「はい…」

有紀は素直に、光輝に腕を出した。

光輝は、有紀の血が出ている箇所を手をかざした。

すると、ポウっと光り、有紀の傷を治していった。

「ふう、さて、俺が乗っているのを知っていた、知らなかったに
関わらず、あの妖怪には懲らしめないとな」

「お、おにいさま…?」

「ユキは、気にするな」

「(いえ、とっても気になってしまいます)」

それにしても、あのおにいさまがキレてしまった。

これは、止められない。

「キャッー!!」

「い、家長くん!?
ビックリするじゃあないか…」

「だ…だつて…
そこに…人が…並んでたから…」

「人？」

島が懐中電灯を照らす。

「な…なんか…、おかしくないか…?」

「清継くん…アレ何…?」

「え…さ、さあねえ…」

戸惑う三人。

「ち…けっこう生き残ってんじゃねーか」

「ヒッ!？」

「ど…どなたさまですかあー！？」

怖がる三人。

「あんまりトンネルがこわれなかったようだな…
とにかく…ここにいる全員…『皆殺し』じゃ。
若、もろともな…ガガガ…」

ガゴゼが言った。

「ひ…」

「ああ…」つちへ…」

「よ、妖怪…………ツ」

清継が遂に叫んだ。

「ふーん、そういふこと」

「だ、誰…?」

「だけど、お前ら。若狙いだっただとしても、俺がいたことを忘れて
いるなんて、余程死にてえーのか?」

「あ、ユキちゃんのお兄さん…」

「アヤツを殺れー!」

「……バカが」

光輝は、刀を振る。

光輝へ向かっていたガゴゼの手下は、一瞬にして消えた。

その時だった。

音をたてて入ってきたのは、奴良組本家の妖怪たちだった。

「！？」

「おほ……… 見つけましたぜ、若ア。
生きてるみたいですねー」

「……………」

光輝は、胸元にあるペンダントを触り、刀をしまった。

「…………… ガゴゼ、貴様……なぜそこにいる？」

中央にいる少年が問う。

「ガ……ガゴゼさま……」

「本家の奴らめ……」

「……… 今度は何ー？」

「そ…そんな…こんなあ…」

「なんだよー、清継くんー」

「わ…わからん…」。

「こんなの…何かの間違いだあー！！！」

「うるさい、静かにしろ」

一刀両断に言う、光輝。不機嫌はMAXだ。

「よ…しよし、もう大丈夫だよ」

「やめろ。おめーらは、顔コエーんだから」

「へ…へイ若…」

「よかった…無事で」

「当たり前だろ、俺がいるだから」

光輝は、少年の正体が誰か、わかったらしい。

「そうだったな…。」

カナちゃん、怖いから目つぶってな」

そのまま少年はガゴゼへ向かう。

「…？誰…？？」

カナにとっては、誰なのかわからない。

「…おにいさま、あの少年は、もしかして…」

「ああ、若頭だよ」

「ちっぴり」

有紀と光輝が会話している最中に、どっさりリクオはガゴゼの元に
着いたらしい。

「私は…ただ人間のガキ供を襲っていた…それだけが…？
何の…問題もないはずだろう…」

「ガ…ガゴゼ…!!」

ガゴゼはあくまでシラを切ろうとしていた。

「子供を殺して大物ヅラか」

「!？」

「オレを抹殺し、三代目を我がモノにしようとしたんなら…
ガゴゼよ、てめえは本当に…小せえ妖怪だぜ」

少年　　リクオは、言い切る。

「なんだあゝ貴様は」

「!？待て…その方は」

木魚達磨が止めの声を出す。

だが、ガゴゼの手下の手が触れることはなかった。

「リクオ様には一歩も近付かせん。
ガゴゼ会の死屍妖怪どもよ…」

「てめ…」

「！なつ…！？」

止めていたのは、首無だった。

「絡新婦せむしめがねの糸いとと毛倡妓けごの髪かみをよってあわせた特製の糸だ。
動けばさらにしめる！」

「なめるなああ」

首無の警告を無視して動く。ゆえに

「ああああ…」

糸によって殺られた。

「な……」

「じいじら……」

「こいつがリクオ……だと……？
生きていたのか……お……おのれ……
くそっ……！！殺せ！！この場で……若を殺せ！！
ぬるま湯にそまつた本家のクソどももろとも！！全滅させてしまえ
！！！」

「若！！！」

「力仕事は……」

「突撃隊長、青田坊にまかせてもらおう……か！！！」

「貴様一人ではないぞ、突撃隊長は……っ！」

「な……」

次第にガゴゼ会の者は殺られ、ガゴゼ一人となった。

「こ…こんなバカな…」。

私の組が…そんな…誰よりも…殺してきた…最強軍団なのに…」

「ガゴゼ。妖怪の主になろうってモンが

人間、いくら殺したからって…自慢になんのかい」

「う…」

「あきらめろ。この企み………指つめどころじゃすまされんぜ」

「く…。ん？」

ガゴゼの目がカナたちに行った。

カナたちも、ハッとなった。

「!?何っ…」

「フハハハハハ。ザマあ見ろ!!」

こいつらを殺すぞ！？若の友人だろ！？殺されたくなければオレを
…」

「キャアアアア」

「……………」

光輝と有紀は、ガゴゼを哀れな目で見た。だって、そこにはすでに
…。

リクオがガゴゼの顔にドスを斬りつけた。

「ヒイイイイイイ」

「若！？」

リクオの行動に、本家の妖怪たちも驚き声を上げた。

「なんで…なんで…貴様のようなガキに…ワシの…ワシのどこがダ
メなんだー！ー！？」

リクオが斬りつけたところを、ガゴゼは痛い、痛いと言っている。

「妖怪の誰よりも恐れられてるといふのに………!!!」

ガゴゼはそう言う。

「………」

「……おにいさま?」

「ユキ、ホントの“恐れ”という意味が何か、わかるよ」

リクオが言う。

「子を貪り喰う妖怪……そらあ、おそろしいさ……」。

「ただどな……弱えもん殺して悦にひたってる、そんな妖怪がこの闇の世界で一番の“おそれ”になれるはずがねえ」

「……!」

「情けねえ……こんなばっかかオレの下僕しもべの妖怪どもは!

だったらー！オレが三代目を継いでやらあー！！
人にあだなすような奴あ、オレが絶対ゆるさねえ」

「若…」

「ひい~~~~いやだ~~~~」

「世の妖怪どもに告げる。オレが魑魅魍魎の主となる！！
全ての妖怪は、オレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ」

リクオはガゴゼを真っ二つに斬った。

「ガ……」

「畏」

その文字は

普通ではない者

「鬼」が「ト」^{むす}を持つ

という意味の字

それはすなわち

未知なるものへの“感情”

「妖怪」そのものを表す

ガゴゼのような悪行も「恐れ」

巨大なモノに対する「おそ聳れ」

脅迫に対する「おそ恐れ」

支配に怯えるのも「おそ懼れ」

だが

それは妖怪の一面に過ぎない

「すげえ…あんな小さいのに…」

「カッコイイ…」

「妖怪つて…本当にいたんだ。あんなスゴイんだ…」

三人は呆然と吐く。

「この達磨…知っていたながら、今気付いた」

闇世界の主とは

人々に畏敬の念さえも抱かせる

真の畏れをまとう者であると

「さあ、ユキ。帰るか」

「そうだね」

その後、本家の妖怪たちの悲鳴が響いた。

第零章（前書き）

小学校時代です

第零章

いや

ダメだ　ダメだって言っているだろう！

いくら我が一族の血でも　様はもう

第零章

「はぁ……はぁ……」

まただ。また、あの夢を見た。

「ふうう、とりあえず、だ」

「光輝様〜、有紀様〜！お時間ですよ〜」

家にいる使用人が俺たちに言っている。

「行くか」

背伸びをし、部屋の外に出る。

「「おはようございます、光輝様」」

「ああ、おはよう」

きくと、いや絶対、同じ対応になっている善のユキの元へ行く。

「おはよう、ユキ」

「あ、ユウにいままで〜」

ユキは、俺に気が付いたのか、飛び出してきた。

「挨拶は？」

「あ…おはようございます、おにこさま」

「よし、行くか」

「…」

「おはようございます、父上、母上」

「おはようございます、おとうさま、おかあさま」

「ああ、おはよう」

父は、櫻井家の現当主である。

「おはよう、コウ、ユキ」

「朝食でございます」

使用人の声で、俺たちの朝食が始まる。

「いただきます」

気持ちがいくらい、綺麗に八モった。

朝食が食べ終わり、学校に行く。

「それでは、行ってきます」

「行ってきます！」

それが俺たち、櫻井家のいつもの日常である。

第一章（前書き）

原作1話分の為、めっちゃ長いです

第一章

時は満ちた

さあ、始めよう

新たな歴史を

第一章

「おにいさま、今日は遅いのですか？」

「ん？…いや、今日は遅くない。一緒に帰れるよ」

「やった〜！」

ユキの喜ぶ声が、何よりも幸せを感じられる。

しばらくし、バスがやって来た。

「おはよう、カナちゃん、奴良君」

ユキの声が出ているが、俺は本に集中しなとな。

「おはよう、ユキちゃん」

「おはよう」

上から家長カナ、奴良リクオ。特に、奴良リクオに関しては、櫻井家一族である俺は、学年が違っても、無関係ではいられない訳にはいかない。

「わー、すっごい大きな家」

「奴良君ち？うっそー」

前方の席に座っている子達が言っているが、当たり前だと思っ。

「（なんせ、魑魅魍魎の主である、ぬらりひょんが住まう家だからな）」

そんなことより、今読んでいる本の内容を覚えないと。

そう思えば、胸元にぶら下がっているペンダントが、少し熱を持った気がした。

授業なんてものは、俺にとっては暇な時間。

授業内容のことは、既に家で習ってしまっているからだ。

それでも、ノートを書かないといけない。ノート提出とかあった時のために。

『（……さま…コウじいさま…）』

ユキの声がした。

「（どうした、ユキ？）」

と聞いても、なんとなく想像はできる。

『（自由研究の授業で、ちょっと気分が悪くなることがあったので、本日は保健室におります）』

ユキの言葉は、ある意味、報告でもあった。

「（そうか…わかった。放課後、迎えに行くよ）」

『（ありがとうございます、おにいさま）』

そして、ユキとの会話は終わった。

「（あのユキが保健室に、か…）」

きつと、教室で何かあったんだろつ…。

でなければ、保健室に行くなんてことにはならない。

「（とにかく放課後、ユキから話を聞かか）」

放課後

「ユキ、迎えに来たよ」

「あ、おにいさま…」

どうやらホントに、保健室にずっといたらしい。

「全く…、訳を聞くからな」

「はい…」

ユキが話す内容…。

それは、人間が妖怪をどう見ているかってことだった。

「……なるほどな」

それが現代での一般的な捉え方だ。

それを知ってしまった、奴良リクオがどう反応してしまうのか、わかってしまう。

「（それは、奴良組にとって）タイミングが悪すぎる……」

俺が呟いてしまった言葉の意味がわからないのか、ユキの表情はハテナマークを浮かべていた。

「「ただいま」」

「お帰りなさいませ、光輝様、有紀様」

「父上は、いつものところにいるだろ？」

「はい」

「じゃあ、ユキ」

「なんですか？」

「俺は、父上のところに行くから」

「わかりました」

そのまま俺は、父上のところに向かった。

「父上、光輝です」

「ああ、入りなさい」

「失礼します」

父上の前に座る。

「光輝。お前も今日は、一緒に行くぞ」

「奴良組の総会、ですよね」

「そつだ。櫻井家と奴良組は、共闘関係にあるからな」

「それは、存じております」

「では、早速行くぞ」

「はい」

そして、父上と俺は家を出た。

道中、父上に本日の学校での出来事を報告した。

それを聞いた父上は、どうやら俺と同じ考えに行ったらしく、表情が少し渋くなった。

俺たちは部屋の隅にいる。

父上曰く、あくまで共闘関係であって、人間である者が共にしない方が幹部らにいいってことらしい。

しばらくし、総大将ぬらりひょんとリクオが入ってきた。

リクオには、戸惑いの表情が見れる。

「しかし最近は大メじゃな…。人間がまったく妖怪をおそれなくなっってしまったな…」

「古いかのう…」

「とはいえ璞町の火事…。あれはワシの悪事ですぞ」

「なに？ごぞんじない？
いやいや拙者も先日…」

「まあしかし、悪行といえは…
ガゴゼ先生でしょう」

とまあ、一言で言えば、悪行自慢大会だ。

「おお、総大将！」

「やあやあ、くくろっ。」

どうじゃい？みんな最近、妖怪を楽しんどるかい？」

「へへへ…。シノギは全然ですな」

「ところで総大将。今回はどういった？」

「うむ…」

そろそろ…三代目を決めねばなと思ってなあ」

ニヤツとして、総大将は言った。

「おお…それはよいですなあ。」

二代目が死んでもう数年…。いつまでも隠居された初代が代理では…おつらいでしょう…」

ガゴゼが言う。

「（嫌な妖怪だな…。この妖怪、良からぬことを考えている…）」

俺の率直な考えだ。

「総大将！」

悪事ではガゴゼ殿の右に出る者はおりますまい！」

「なんせ今年におこった子供の神隠しは…、全てガゴゼ会の所業ですからな！」

「いやいや…。」

大量に子を地獄に送ってやるのがワシの業ですから

「いやー、さすが妖怪の鑑ですなー！！ハハハ」

それらの言葉を聞いて、リクオの様子がさらに変わる。

「（俺にとっては、アホくさい話だな…）」

「フン…」

木魚達磨は鼻で笑った。

「なるほどのう。」

あいかわらず、現役バリバリじゃのう、ガゴゼ……」

「おまかせ下され……」

「だが…お前じゃあダメじゃ。」

三代目の件…このワシの孫、リクオをすえようと思ってな」

「!?!?」

「な…なんじゃとお……」

「なんとっ…リクオ様とは………」

「まだ幼い子供ではござらぬか……」。

たしかに…総大将の血は継いでいるが……」

戸惑いだす幹部ら。

「どうしたガゴゼ…
顔色が悪い」

木魚達磨がガゴゼに言った。

「そっそんなことはないぞ…木魚。………」

ガゴゼは慌てて言う。

「じいちゃ………」

「どうしたリクオ…よろこばんか。
お前が欲しがったもんじゃない」

リクオの変化に気づいていない総大将。

「え」

「ワシの血に勝るものはない。お前はワシによく似てる。本家の
奴らもそれは十分承知。

さあ採決を取るうではないか！！リクオ…お前に継がせてやるぞ！

奴良組72団体：構成妖怪一万匹が今からお前の下僕じゃ！！」

「い…いやだ！！」

リクオは否定の言葉を出した。

「何？」

「こ…こんな奴らと一緒になんかいたら、人間にもっと嫌われちゃ
うよー！！」

「リクオ…？」

「妖怪が…こんな悪い奴らだって知らなかった！
おじいちゃんになんか、ぜんぜん…似てないよー！！」

「あ」

そのまま外へ走り出すリクオ。

「こりゃ、リクオ」

「（あーあ、やっぱりタイミング悪いね…）」

「リクオ…」

「……………総大将……………」

失礼ながらリクオ様は…本当に血のつながりがありますか…？」

疑問を出したのは、奴良組相談役である木魚達磨だ。

「姿、形はもとより、考え方もまるで人間ですなあ……………」

その言葉に黙る総大将ではない。

「アーン？」

だが総大将も、リクオのまさかの否定に戸惑っているのだろう。

もうなんか、面倒くさい。だから俺は、父上にそつと言っ。

「俺、リクオを追いかけます」

「…ああ、行ってこい」

許可も出たことなので、飛び出したリクオを追いかけることにした。

「あ、光輝様」

リクオの側近である雪女が声を上げた。

「リクオ」

「あ…櫻井さんのお兄さん…」

「嫌いになったか、妖怪が」

「それは…」

「まあ、全ての妖怪を好きになれ、なんてことは無理だ。人間にだって、好きな奴や嫌いな奴はいるからな」

「……」

「だから、さ。リクオ自身で“答え”を見つけてよ」

伝えたいことを言った俺は、そのまま去った。

「おにいさま、今日も一緒に帰るのですの？」

「ああ、というより、今日は気になることが起こりそうなんだ」

「あ、アレは……」

ユキは指したのは、リクオとカナの姿だった。

カナは、バスへ向かっていった。

「奴良君！」

「うわぁっ」

「さすがに後ろから声をかければ、誰だって驚くだろ、ユキ」

「エへへ…。」

奴良君は、バス乗らないの？」

「乗らないよ」

「お前、昨日のこと、まだ引きずっているのか？」

「……」

「まあいい。昨日、俺が言ったこと忘れるなよ」

「おにいさまが何を言ったのか、ご存知ではありませんが、無理しないで下さいね」

「じゃあな」

「では」

後ろの席に座っているカナとその隣の子が話をしていた。

「ね…ね…奴良君じゃないけど…あの伝説って…続いているらしいよ
」

「え…何が…」

「だから…妖怪ー？」

何人も子供が神隠しにあっただって！

ちようど…このあたりで…」

「や、やめてよ〜」

その会話を聞いていた俺は、一段と警戒心を強める。

この会話の妖怪の正体など、昨日の総会で判明しているのだから。

「おい！！君たち！！待ちたまえ！！」

妖怪など実際にはいない！！ボクが研究で…」

「！！すぐに、背を下げるッ！！」

一瞬だが、窓に妖怪が見えた。

あの妖怪は、やはりガゴゼ会の…。ならば、衝撃が来る、すぐに。

「キヤアアアア…」

俺が声を張り上げた後すぐに、バスに衝撃が走った。

「…………ユキ…………ユキ、大丈夫か？」

「う…………お、にいさま…………？」

ユキは、うっすらと目を開けた。

「腕…………出して」

「腕？」

「血、出ている。治すから」

「おにいさまがやらなくても、私自身が…」

「お前だと、敵にバレる。お前はまだ、血の力加減が不安定だ。だから、俺がやってやる」

「はい…」

有紀は素直に、光輝に腕を出した。

光輝は、有紀の血が出ている箇所を手をかざした。

すると、ポウッと光り、有紀の傷を治していった。

「ふう、さて、俺が乗っているのを知っていた、知らなかったに関わらず、あの妖怪には懲らしめないとな」

「お、おにいさま…？」

「ユキは、気にするな」

「……………」

ユキは、何か言いたそうだったが、俺は、行動を起こした、ガゴゼを懲らしめるため、あえて無視した。

「キャッー!!」

「い、家長くん!?
ビックリするじゃあないか……」

「だ…だ…だ…
そこに…人が…並んでたから……」

「人？」

島が懐中電灯を照らす。

「な…なんか…、おかしくないか…?」

「清継くん…アレ何…?」

「え…さ、さあねえ…」

戸惑う三人。

「ち…けっこう生き残ってんじゃねーか」

「ヒッ!?!」

「ど…どなたさまですかあー!?!」

怖がる三人。

「あんまりトンネルがこわれなかったようだな…
とにかく…ここにいる全員…『皆殺し』じゃ。
若、もろともな…ガガガ…」

ガゴゼが言った。

「ひ…」

「ああ…こっちへ…」

「よ、妖怪……………ッ」

清継が遂に叫んだ。

「ふーん、そういふこと」

「だ、誰…?」

「だけど、お前ら。若狙いだったとしても、俺がいたことを忘れて
いるなんて、余程死にてえーのか？」

「あ、ユキちゃんのお兄さん…」

「アヤツを殺れー！」

「…………バカが」

光輝は、刀を振る。

光輝へ向かっていたガゴゼの手下は、一瞬にして消えた。

その時だった。

音をたてて入ってきたのは、奴良組本家の妖怪たちだった。

「!?!?」

「おほ……………見つけましたぜ、若ア。
生きてるみたいですねー」

「（奴良組本家の妖怪……………ならば安心だ）」

光輝は、胸元にあるペンダントを触り、刀をしまった。

「……………ガゴゼ、貴様……………なぜそこにいる?」

中央にいる少年が問う。

「ガ…ガゴゼさま…」

「本家の奴らめ…」

「こ…今度は何ー？」

「そ…そんな…こんなあ…」

「なんだよー、清継くんー」

「わ…わからん…」。

「こんなの…何かの間違いだあー！！！」

「うるさい、静かにしろ」

一刀両断に言う、光輝。不機嫌はMAXだ。

「よ…しよし、もう大丈夫だよ」

「やめる。おめーらは、顔コエーんだから」

「へ…へイ若…」

「よかった…無事で」

「当たり前だろ、俺がいるだから」

光輝は、少年の正体が誰か、わかったらしい。

「そうだったな…」

カナちゃん、怖いから目つぶってな」

そのまま少年はガゴゼへ向かう。

「…？誰…？？」

カナにとっては、誰なのかわからない。

「……おにいさま、あの少年は、もしかして…」

「ああ、若頭だよ」

「やっぱり…」

有紀と光輝が会話している最中に、どうやらリクオはガゴゼの元に着いたらしい。

「私は…ただ人間のガキ供を襲っていた…それだけが…？
何の…問題もないはずだろう…」

「ガ…ガゴゼ…!!」

ガゴゼはあくまでシラを切ろうとしていた。

「子供を殺して大物ヅラか」

「!?!」

「オレを抹殺し、三代目を我がモノにしようとしたんなら…」

ガゴゼよ、てめえは本当に…小せえ妖怪だぜ」

少年　　リク才は、言い切る。

「なんだあゝ貴様は」

「！？待て…その方は」

木魚達磨が止めの声を出す。

だが、ガゴゼの手下の手が触れることはなかった。

「リク才様には一歩も近付かせん。
ガゴゼ会の死屍妖怪どもよ…」

「てめ…」

「！なっ…！？」

止めていたのは、首無だった。

「絡新婦けしむすめの糸と毛倡妓けしむすめの髪をよってあわせた特製の糸だ。動けばさらにしめる！」

「なめるなああ」

首無の警告を無視して動く。ゆえに

「ああああ……」

糸によって殺られた。

「な……」

「じじじら……」

「こいつがリクオ……だと……？」

生きていたのか……お……おのれ……

くそっ……！！殺せ！！この場で……若を殺せ！！

ぬるま湯にそまつた本家のクソどももろとも！！全滅させてしまえ

！！！！

「若……！！」

「力仕事は……」

「突撃隊長、青田坊にまかせてもらおうか……！」

「貴様一人ではないぞ、突撃隊長は……っ！」

「な……」

次第にガゴゼ会の者は殺られ、ガゴゼ一人となった。

「こ……こんなバカな……」。

私の組が……そんな……誰よりも……殺してきた……最強軍団なのに……」

「ガゴゼ。妖怪の主になろうってモンが

人間、いくら殺したからって……自慢になんのかい」

「っ……」

「あきらめろ。この企み……指つめどころじゃすまされんぜ」

「く……。ん？」

ガゴゼの目がカナたちに行った。

カナたちも、ハツとなった。

「！？何っ……」

「フハハハハハハ。ザマあ見る！！

こいつらを殺すぞ！？若の友人だろ！？殺されたくなければオレを

……」

「キヤアアアア」

「……………」

光輝と有紀は、ガゴゼを哀れな目で見た。だって、そこにはすでに……。

リクオがガゴゼの顔にドスを斬りつけた。

「ヒイイイイイイ」

「若!?!」

リクオの行動に、本家の妖怪たちも驚き声を上げた。

「なんで…なんで…貴様のようなガキに…ワシの…ワシのどこがダメなんだー!?!」

リクオが斬りつけたところを、ガゴゼは痛い、痛いと言っている。

「妖怪の誰よりも恐れられてるといつのにー!?!」

ガゴゼはそう言う。

「(やるなあ…、リクオ)」

「……おにいさま?」

「ユキ、ホントの“恐れ”という意味が何か、わかるよ」

リクオが言う。

「子を貪り喰う妖怪…そらあ、おそろしいさ…。
だけどな…弱えもん殺して悦にひたってる、そんな妖怪が
この闇の世界で一番の“おそれ”になれるはずがねえ」

「!!」

「情けねえ…こんなんばつかかオレの下僕しもべの妖怪どもは！
だったら!!オレが三代目を継いでやらあ!!
人にあだなすような奴あ、オレが絶対ゆるさねえ」

「若…」

「ひい~~~~いやだ~~~~」

「世の妖怪どもに告げる。オレが魑魅魍魎の主となる!!
全ての妖怪は、オレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ」

リクオはガゴゼを真つ二つに斬った。

「ガ……」

「畏」

その文字は

普通ではない者

「鬼」が「ト」^{むち}を持つ

という意味の字

それはすなわち

未知なるものへの“感情”

「妖怪」そのものを表す

ガゴゼのような悪行も「恐れ」

巨大なモノに対する「^{おそ}聳れ」

脅迫に対する「^{おそ}怕れ」

支配に怯えるのも「懾れ」

だが

それは妖怪の一面に過ぎない

「すげえ…あんな小さいのに…」

「カツコイイ…」

「妖怪って…本当にいたんだ。あんなスゴイんだ…」

三人は呆然と吐く。

「この達磨…知っていたながら、今気付いた」

闇世界の主とは

人々に畏敬の念さえも抱かせる

真の畏れをまとう者であるよ

「さあ、ユキ。帰るか」

「そうだね」

その後、本家の妖怪たちの悲鳴が響いた。

第一章（前書き）

読まなくても次話に影響はありません

第一章

奴良リクオは空を飛んでいた。

第一章

「まったくリクオ様。

帰りが遅くなって、心配して来てみたからいいよつなもの、あの距離を歩いて帰ろうなどと…

これからは、嫌がれても絶対お供をつけますからね！」

「……………」

リクオは、カラス天狗に運ばれていた。

「なあカラス天狗。
ボクって…人間なのかなあ…？」

「え？」

「そりゃまあ、お母様もおバア様も人間ですから…」

「だよーね！」

「でも、総大将の血も…
当然…四分の一は入っております」

「よ…四分の一も…？」

「そうです。

ですから…もっと堂々としていねばよいのです」

「……………」

「あ……………」

「か…帰ってこられた!!」

「若!!御無事で」

そんな声たちに迎えられた。

「?どーしたのじゃ、皆の衆…」

ボクも思っていた疑問をカラス天狗が言った。

「だって…だって…」

ボクはテレビに気が付く。

『中継です!!』

浮世絵町にあるトンネル付近で起きた崩落事故で路線バスが“生き埋め”に…

中には浮世絵小の児童が多数乗っていたと見られ…』

「!？」

え…？なんで！？バスが」

ボクはテレビの報道に驚いた。

「おお、リクオ帰ったか…

お前悪運強いのー」

「リクオ様が帰っておられるぞ」

「本当じゃ」

「死んだとは、うそか」

「よかった、よかった」

そんな周りの声は、リクオには耳が入っていないなかった。

リクオが思い出すのは、

「あれのがすと30分後だよ」

「ほつときなよ 乗る！！」

と言ってくれたカナちゃんに

「まあ、全ての妖怪を好きになれ、なんてことは無理だ。人間にだって、好きな奴や嫌いな奴はいるからな」

「だから、さ。リクオ自身で“答え”を見つけるよ」

と言った櫻井さんのお兄さん

「奴良君は、バス乗らないの？」

「おにいさまが何を言ったのか、ご存知ではありませんが、無理しないで下さいね」

と心配してくれた櫻井さん

の声と姿だった。

ドクン、ドクン

「いやあああああ、リクオ様!!
心配しましたぞ!!」

「ワシの方が心配じゃ青!!」

「大丈夫ですかあ!？」

おい、さゆをもってこい!!
シヨクですよね」

青田坊が周りの小妖怪たちに指示しつつ、リクオを心配する。

「…助けに…行かなきゃ…」

リクオは外へ飛び出す。

「どこへ行くんじゃ、こんな時間から!？」

じーちゃんがボクを止めようとする。

「誰かつはきものを!!
決まってるじゃんか!!
カナちゃんと櫻井さんたちを助けに行く!!
ついてきてくれ!!青田坊!!黒田坊!!みんな!!」

「へ…へイツ!!」

「まで!待ちなされ!!」

「木魚達磨殿…?」

木魚達磨が助けに行こうとするボクらを止めた。

「なりません…」

人間を助けに行くなど…言語道断!!」

「えっ…!?!」

「な…なんで…?」

「そのような考えで我々、妖怪をしたがえることが出来ると思いか!?!」

我々は妖怪の総本山：奴良組なのだ！！人の気まぐれで百鬼を率いらせてたまるか！！

ましてや、櫻井家の者ならば、助けなど必要ない！！」

「達磨殿！！若頭だぞ！！

無礼にも程があらあ！！」

当然のように、青田坊が怒る。

「無礼？

フン…貴様…奴良組の代紋“畏”の意味を理解しているのか？
妖怪とは…人々におそれを抱かせるもの。それを人助けなど…
…笑止！！」

「てめえ …！！」

「青田坊！？」

「うわ …！！ケンカだ！！」

「青田坊と達磨様が…

ワシらどうしたらいいんじゃ

！？？」

「や…やめねえか!」

そんなことをしている暇はねえーんだよ。

「時間がねえんだよ。」

おめーのわかんねー理屈なんかききたくないんだよ!!木魚達磨」

「?」

「なあ…みんな…」

「若…?」

「若の姿が…?」

「お…おい…」

「アレ」

小妖怪たちの言う通り、リクオの姿が変化している。

「オレが“人間だから”だめというのなら
妖怪ならば、オマエらを率いていいんだな!?
だったら…人間なんてやめてやる!」

「え…… (なんだ…!?これは…この目…さっきまでとは別人)」

リクオの変化に、戸惑う木魚達磨。

「おめーら、ついてきな」

「若!?!待ちなされ!!!」

木魚達磨はまだ止めようとする。

「木魚達磨殿………」

首無が声をかける。

「今はとりこみ中じゃ!…!後にしろ」

それでも首無は、顔だけを木魚達磨の耳に近付き言っ。

「リクオ様が乗るはずだったバスが事故にあったということは、誰かに狙われたのかも……」
「刺客か……もしくは……」

その首無の言葉に木魚達磨は止めるのを止める。

「若……！ワシら本家はみんなついていきますぞ……！」

「この黒田坊、元よりそのつもりよ……！」

「今夜は何だか……」
「血が……あついなあ……」

「リクオ様言ったでしょう。それが、妖怪の血です」

カラス天狗はオレの独り言を拾い、言った。

「血…?」

「おじいさまの血です」

「リクオ様は…ワシらを率いていいんです」

「あなたは

ぬらりひよん
総大将の血を

四分の一も継いでいるのですから!…!」

現場に着けばわかる。

こんなところは、崩れるようになるところじゃねえってことが。

絶対に、妖怪の仕業であることが。

それも、オレを抹殺しようとした妖怪^{やっ}。

待ってる、カナちゃん、みんな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3123ba/>

妖の世界

2012年1月8日02時48分発行